

爬龍船考：沖縄民俗学の視点から

比嘉, 政夫 / HIGA, Masao

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

149

(発行年 / Year)

1990-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002552>

爬龍船考

——沖繩民俗学の視点から

比嘉政夫

一、はじめに

沖繩の文化を日本文化の中できわだった独自性のあるものとしてとらえ、この地域の文化的個性を強調するために、奄美から八重山にいたる島々の連なりを「琉球弧」とよぶことがある。沖繩の文化の個性は如何に形成されたのか、それは基層的に日本本土と共通するものを持ちながら、地理的、歴史的条件をはじめさまざまな要因によって本土とは異なる文化要素も内包するようになったとみることができる。これまでの、とくに戦後初期までの沖繩民俗研究は日本の古代文化の残存を沖繩の文化に見つけようとする姿勢が顕著であった。しかしながら今日では、沖繩の文化が日本本土の文化と源流や系統を同じくすることを論じるだけでなく、沖繩の文化が歴史的に育んできた独自性に目を向け、

日本文化が豊かな多様性を持つ文化であることを表わす個性的な地域文化として、あるいは日本本土文化に対峙する文化として沖縄文化を位置づけようとする考え方も出てきている。

沖縄文化に日本の他の地域文化にない強烈な示差性、弁別性を与えたものとして、交易や人間の交流を通じて受容した中国や朝鮮あるいは東南アジアの生活様式Ⅱ文化が考えられる。なかでも中国との文化交流は、中国の明朝、清朝期における冊封体制を背景にした交流だけみても日本の他の地域にはない特異なものであり、その密接な関係は沖縄の生活の隅々にまでみられる中国文化の受容の仕方に表われている。沖縄の文化にみられる中国文化の受容・摂取の影響は、建築様式や社会組織など外面的、内面的生活の多面にわたるが、沖縄の年中行事の中の爬龍船行事をとりあげて中国文化の受容のかたちをみながら、沖縄文化の個性が外来文化の摂取を経てどう形造られたか、考えてみたい。

二、民俗文化としての年中行事

一つの民族あるいは地域の文化を理解しようとするとき、年中行事が大変重要な手掛りとなるので文化人類学や民族学の実地調査にはまず年中行事の調査から手掛けることがよくある。年中行事とは何か、なぜそれが文化や社会の理解に役立つ鍵になるのか、考えてみよう。

年中行事についての定義はいろいろあるが、まず民俗学辞典をひもといてみよう。「年々同じ暦時がくれば、同じ様式の習慣的な営みが繰り返されるような伝統的行事をいう。ただしそれは個人に

ついて年々繰り返えされるものではなく、家族や村落・民族など、とにかく或る集団ごとにしきたりとして共通に営まれるものである」(柳田国男監修、民俗学研究所編『民俗学辞典』^(注①))とあり、ついでに別の分野の事典を引くと「集団の営む伝承的な社会的行為であって、元来、農業生産のための予祝と収穫ないし除災の意味をもつ季節祭の性格を有する」(福武直、日高六郎ほか編『社会学辞典』^(注②))とある。年中行事は沖縄の方言でいえば、ウイミ(折目)、シチビ(節目)であり、それはなにかの区切りを意味し、季節の変わり目、または農業や漁業など生産活動の一つの区切りとむずびついている。

遠い昔、今日のように文字や太陽暦(新暦)も太陰暦(旧暦)もない時代には、生活を支えている主な作物の播種から収穫までが一つのサイクルであり、月日の流れの区切り、新しいサイクルへの転換の時季を作物の生長のリズムにあわせたのである。沖縄の各地域の年中行事を観察していくと、遠い昔の年の変わり目を示すものが今日のカレンダーの新年とはかなりずれた時季に行なわれていることをみつけることができる。宮古や八重山の各地にあるシツ(節)とよばれる行事は、夏の盛りあるいは秋風の吹く季節に行われるにもかかわらず、古い年を送り新しい年を迎えることを表わす儀礼が含まれている。たとえば、旧暦五月から六月に行なわれる多良間島のスツウブナカ(節祭、節祝)には、スディミズ(僻で水)を浴びて永遠の生命力を得る儀礼があるし、八重山の西表島、祖納のシチイの行事は旧暦九月に行なわれるが、その祭りの前夜は「年の夜」(大晦日)と称し、旧年の座を払い新年を迎えるために、浜べの小石を家の各所に撒く儀礼がある。沖縄民俗研究の先駆者の一人である宮

城真治は「古代沖縄の正月は陰暦八月であつた」^(註⑤)というきわめて示唆に富む内容の論稿を残しているが、正月が一月と八月の二度あつたというよりも、今日の暦とは異なる年の変り目、区切り方があつたことを私たちは身近な事例のなかから知ることができるのである。

年中行事が「折目」という言葉で示されるように、永遠に続く日常生活の時間的流れに一つの区切りをつけるはたらしをしていること、それは昔も今も人間の生きていくためのさまざまな営為のなかで、大きな意味をもっているものである。区切りをつけることそれは農業や漁業など生産活動の中で一つの作業から次の作業に移るきっかけとなったり、あるいは人間が彼自身の成長する過程のなかで大きく自らを変換させる時期であつたり、集団にとっても一人の個人にとっても人間の生活につねに未来への飛躍、前進を呼び込む躍動感を持ったものにちがいない。

年中行事はまた、さまざまな儀礼で満たされている。儀礼とは慣習に基づき一定の形式を持った行為で、特に宗教儀礼は神霊やもろもろの超自然と交流をし、メッセージを交わそうとする人間の想念の表出であり、いろいろな価値観、神観念や宇宙観など宗教的な思考様式が外見的形をもって表現されたものとみることができる。だから祭りの場で演じられるものまねや歌謡、折りの詞唱、供物なども儀礼の一つである。無論、祈禱や舞踊、綱引のような競技なども神や自然との交流を示す儀礼のひとつであり、このような儀礼のなかには合理的、科学的な思惟とはまったくかけはなれた呪術的な要素を含んだものもある。それゆえ、かつては呪術的思考に支えられていた農耕儀礼などは、生産に関

する知識、技術の進歩、社会構造の変化などによって、儀礼は衰退し、変化し形骸化していくのである。

沖縄の伝統的村落の年中行事は、稲を中心とする穀物の生産活動を軸にしている、播種から収穫にいたる生産のリズムと調和して行なわれているのが多い。旧暦二月、三月四月、五月のウマチーと呼ばれる麦や稲の祭りは、かつては王府をはじめ各村落、親族集団や家族のレベルで厳肅な儀礼が行なわれていたのである。順調な穀物の発芽を祈願する種子取りの儀礼や、害虫など穀物にかかるものもろの災厄を祓うアブシバレーの行事も、農家の人々の生活のリズムに欠かせないものであつた。しかしながら、稲の品種改良、肥料、農業などの農耕技術の進展に伴い生産活動のリズムが変り、また主要作物が稲からさとうきびへと転換してきたなかで、年中行事のあるものはその存在の意義を根底からゆさぶられている。

年中行事がどのように私たちの生活に関わっているかについて述べてきたが、年中行事には人々の過去から現在に至る生産活動に根ざした内面的、外面的な生活の形が反映していて、その変遷のあとをたどることは、民俗社会の生活史、精神史を知ることにつながると思う。冒頭に述べたように、沖縄の生活様式には中国や東南アジアなどの文化の影響も少なくなく、そのことが沖縄文化の個性を形づくつているともいえる。いったいどのような年中行事に外来文化の要素が含まれているか、そしてそれが土着の文化要素とどのように調和し拮抗しているかなど、次節以降で爬龍船行事のなかのさま

さまざまな儀礼を分析・比較しながら考えてみたい。

三、爬龍船（ハーリー）行事にみる外来文化の影響と民俗文化的地盤

ハーリー鉦の音は夏の到来を告げる沖縄の風物詩である。「ハーリー鉦が鳴ると梅雨が終る」というのが沖縄の諺であるが、漁民の祭りとしての爬龍船行事はまさに海のシーズンの幕を開くものであり、そのことから灼熱の日差しが沖縄の島々を覆う。爬龍船行事は漁民の町や村を中心に沖縄の各地に分布している。那覇のハーリー、糸満のハーレーなどがよく知られているが、奄美から八重山の島々まで広く見られるこの行事は、沖縄の年中行事のなかで土着的な文化と外来文化との融合したものとして位置づけることができるよい例であり、この行事に含まれる儀礼の要素分析を通して外来文化の受容に触媒的役割を果たした土着的なものの究明や、この行事の構造分析を通じて、中国大陸や東南アジアに広く分布する同種の行事の比較研究に役立つ指標を見つけることができると考える。幸いに沖縄の爬龍船行事の調査研究も最近進んできており、日本のなかで沖縄の爬龍船行事と類似する行事である長崎の「ペーロン」についての研究もいくつか発表されている^(注④)。また中国大陸や台湾における「龍舟競渡」についてもその分布や儀礼的な内容についても貴重な報告があるので、今後東アジア、東南アジアを鳥瞰した爬龍船行事、龍舟競渡など船漕ぎ儀礼をともなった祭祀行事の分析、比較が大きな課題となってくると思う。私自身も香港漁民の祭祀生活を研究調査するプロジェクトに一九

八一年から一九八三年にかけて参加し、香港地域のいくつかの漁村における龍舟祭を見る機会を得た。^(注⑤)さらに中国大陸の貴州省や雲南省で龍舟競技の祭りを見ることができた。ここではそのような体験で得た資料をまじえながら、沖縄の爬龍船行事をみることにしよう。

沖縄においては爬龍船行事（ハーリー）を含めて祭祀行事に船漕ぎをとまうものとしてはいくつかの種類がある。ごく大まかに類別すれば次の如くであろう。

(イ) 旧暦五月四日の爬龍船行事

(ロ) 沖縄の北部のウンジャミ行事や八重山のシツや豊年祭など豊稔祈願の儀礼とむすびついた船漕ぎ競争

(イ)の五月四日いわゆるユッカヌヒーには、那覇あたりではこどもにとって最良の日で、玩具を買ってもらう日であった。そして那覇や沖縄本島南部の糸満市及びその周辺地域で爬龍船競漕が行なわれる。この五月四日の爬龍船競漕は端午の節句（五月五日）に中国や日本の長崎において行なわれる龍舟競技と系統を同じくするものである。中国漢民族たとえば香港では龍舟賽といい、長崎ではペーロン競漕とよんでいる。長崎のペーロン、沖縄のハーリーという呼称は、扒龍もしくは爬龍の漢語読みから来たものであろう。扒龍には漕ぐという意味があるようで、香港では龍舟の漕ぎ手の結社に扒艇行というのがあった。爬龍の爬も掻くの意味から水を掻いて進むという意味をもつに違いない。

この五月四日の爬龍船行事は確かに中国に源流を求めることができそうである。なんとすれば、十

八世紀のはじめに編集された『琉球国由来記』には、沖縄における爬龍船の起源についていくつかの記述がある。すなわち巻八の「那覇由来記」に「爬龍船ノ由来」として、次のような記述がある。

「當国二爬龍舟漕初年代、不考知。俗諺曰。長濱大夫ト云人、(其姓名不傳)南京ノ爬龍舟ニ倣テ造ケルトナリ。故ニ五月三日ニハ、彼人ノ為メニトテ、西ノ海ニテ、漕トナリ。故ニ漕ケル人員、白帷子ヲ著ス。昔ハ久米村爬龍舟、那覇爬龍舟、若人爬龍、垣花爬龍、泉崎爬龍、上泊・下泊爬龍舟ナドイヒテ、數多有ケルトイヘリ。當時ハ那覇・久米村・泊・三龍殘ケルナリ。」^(注⑦)

さらに、巻九の「唐榮舊記全集」には、
「爬龍舟。蓋為甲屈原而作也。本國原無比舟焉。窃按諸書、屈原楚賢臣也。事懷王、被讒貶于江南。五月五日、投汨羅而死。楚人、每至此日、皆傷其死、并將舟楫以拯之。歷年漸久、改造龍舟。是乃龍舟之所由興也。今見、中華江村人民、每年五月、多造龍舟、競渡為甲。而稱之曰。為祝太平之盛儀也。然則本國、始設此舟者、蓋三十六姓、既到本國、然後為祝太平儀事、而能設此舟也。明矣。然本國從何世何年、始用此儀未知其詳焉。」^(注⑧)
とある。

また「球陽」には雨乞の祈願に首里の龍潭に龍舟を浮かべたという記述もある。爬龍船と雨乞儀礼との関連については後に考察するが、興味深いことは先の爬龍舟の中国からの伝来を説いた記述が「五月のはじめ」に漕いだということになっていることである。しかしながら中国においても龍舟競

漕の行なわれる時期は地域によってあるいは民族によってさまざまなであるが、沖縄と強い結びつきのある福建省あたりでは、五月五日いわる端午の節句に漕いでいるようであるが、沖縄では何故に五月四日になったか、そのことは後に機会をあらためて考察しなければならぬ。五月四日に行なわれる爬龍舟行事はそのハリー、もしくはハレーという呼称の源流を含めて考えても、中国文化と深くかわつていそうである。しかしながら全くの中国の文化からの模倣であろうか。

沖縄の文化にはいろいろななかたちで中国文化の影がみえる。巨大な亀甲型の門中墓もそうであるし、爬龍船以外の年中行事、たとえば墓前に一族が集う先祖まつり、清明祭など人々のものの考え方や行動のしかたなどにも大陸文化の影は色濃い。だが全くの借用で、沖縄の生活様式の根底にそれらの外来文化の受容を容易にする、なんらかの相通するものはなかったか。清明祭という祖先祭祀の慣習が広がったのも、土着的な生活様式である正月十六日の墓前祭祀が受容の「受皿」的役割を担ったということができよう。爬龍船競技という行事、祭祀をする人々の思考様式、その思考の外的表現としての儀礼のかたち、また儀礼を行なう人々の役割や地位のきめかたは、中国や他のアジアの地域に住む人々とどこにちがいがあり、どういうぐあいに共通するのかをたしかめてみたいと思う。沖縄の爬龍船行事、中国の人々の龍舟祭を、綿密に比較対照させながら彼我の民俗文化のそれぞれの個性を見付け出してみよう。

香港や中国大陸における私の龍舟祭体験によれば、さまざまな儀礼が沖縄の爬龍船の催礼や行事を

支えている信仰形態や世界観などと共通しているように感じてしまうことが多かった。

日本と中国の龍舟行事の比較を試みた、台湾の中央研究院民族学研究所の黃麗雲女史は龍舟競技の意味を次のように考察している。彼女は龍舟競技の祭祀的機能と舟に象徴された龍の意味を考えている。すなわち

龍舟競度の機能として(1)雨乞い(2)豊作祈願(3)水神祭(4)水死者の鎮魂(5)厄除禳災(6)屈原を救う、ということを挙げ、さらに爬龍船によって象徴される龍の意義として、(1)龍は雨神で雨をもたらす呪力を有す(2)龍は龍神で(「水神」)多産をもたらす呪力を有す(3)龍は水神で水を司る呪力を有す(4)龍は水世界の主で水死者を司る呪力を有す(5)龍は海龍王で逐疫禳災の呪力を有す(6)龍は江を翻す呪力を有す、と分析している。^(注⑨)

永年中国を中心とする龍舟行事について文献研究を続けている国立民族学博物館の君島久子教授は、龍舟行事の意味について、ある英雄的人物の死を悼みその霊をなぐさめるためという解釈がなされている背後に疫病を放逐し災いをはらう意味があることを強調している。さらに豊稷を祈るなど農耕との関係もあることを指摘している。^(注⑩)英雄的人物の霊を弔うためという龍舟祭の起源説話は楚の詩人屈原がときの政治に対する進言が入れられず洞庭湖の近くの汨羅で入水した故事が有名であり、沖繩の爬龍船の起源説もそれと同じ類型のものがある。この屈原に結びつける爬龍船の起源説は多くの研究者が指摘するようにいわば教科書的な起源論であり、民族によって地域によってさまざまな起源説話

があり、民話の比較研究においても興味深い課題である。

日本の社会人類学に大きな足跡を印し、沖繩研究にも多くの功績を残された故馬淵東一先生は爬龍船について二つの論文を書かれているが、ひとつは沖繩の爬龍船行事を中心に書かれており、他は中国だけでなくアジア地域の龍舟行事に関するヨーロッパや中国の研究者をふくむ民族学、文化人類学的研究成果の紹介とコメントがなされている。^(注⑪)両論文とも沖繩の爬龍船研究を世界的視野から行うための有益な示唆を数多く含んでおり、沖繩の爬龍船だけでなくアジアの龍舟行事の研究の到達すべき目標が示されている。その内容にここで詳しくふれることは省略せざるを得ないが、本稿のテーマである沖繩の爬龍船行事の研究につながるのは随時紹介していくことになる。馬淵先生は特に、大陸から入って来た五月四日系の「公式主義」的な爬龍船行事と、土着の農耕のサイクル、季節のリズムに対応したウンジャミ、シツの船漕ぎ催礼とを分けて考察されていて、そのように爬龍船行事に大陸系と在来系があることを喜舎場永珣氏が戦前すでにいわれていたことであると指摘されている。

そこで沖繩の爬龍船に話をもどすことにしよう。糸満や那覇などの旧暦五月のユッカヌヒのハーリー(爬龍船)行事は、先述したように明らかに中国で端午節のころを中心にして行なわれる龍舟節と軌を一にするものであり、史書にもその習俗の伝来のいきさつが記されている。しかしながら、那覇や糸満のハーリー行事がすべて外来文化の受容によって成り立っているとは考えられない。周知のように五月四日のハーリーは漁民の祭りとして知られ、宮古、八重山にも糸満漁民の移住とともにこ

の祭りが広まったといわれている。漁民の祭りであり、ときには「海神祭」として呼ばれる行事であるが、この祭りの基底には琉球民俗社会独特の世界観ないしは神観念に支えられた農耕儀礼の要素がみられ、女性司祭者ノロを中軸とする村落または村落連合の祭祀体系に組み込まれている。だからこの五月四日に各地で行なわれる「ハーリー」を大陸系だとして、無視することはできない。琉球列島の人々の信仰には、はるかな海のかなたから神が村を訪れ、豊穡をもたらしてくれるという、いわゆる「ニライカナイ」からの来訪神への渴仰を表現する祈りが大きく息づいている。^(注⑧)ニライカナイからの神々がシマ(村落)にユー(豊穡)をもたらすという観念、そして海のかなたの楽土からのユーを乞う人々の想念は、後述するように舟漕ぎの催礼となつて沖縄各地の他の年中行事に表われている。糸満の爬龍船行事のクライマックスは沖合からシマをめざして漕ぎ寄せてくる競漕、アガイバーレであるが、それはまさにユーをシマに迎え入れる催礼であり、岸に漕ぎ着いたハーリーの漕ぎ手たちは着順にノロの家を訪れ祝福の酒杯を受けるのである。このように糸満の爬龍船行事は五月という時期や史書にある南山王の弟汪応祖が明国にならつてはじめてという記述から、中国大陸からの伝来文化であるとみることができるが、単なる外来文化の受容ではなく土着の信仰体系と融合したものとすることができる。

糸満の爬龍船(ハーレー)は独特の漁業技術と積極的な開拓精神で知られる糸満漁夫と共に県内外を問わず有名であるが、爬龍船の行事は周辺の村落、名城や喜屋武でも同じ期日に行なわれていて、

その儀礼内容は素朴ながら糸満と共通する儀礼のほかに、ある意味で糸満ハーレーの祖形的なものと思われる儀礼も保持している。たとえば名城の爬龍船には、沖合から村の浜を目指して競漕するアガイバーリーがまだ形を留めており、祭りの締めくくりとして、地先の小島で神と祖先に異なった供物をそなえる儀礼などがあり、それは後述するように、海神への祈願と死者への鎮魂的な供養儀礼の多面的な性格を有する爬龍船行事の意味を探索重要な鍵となりそうである。そのような儀礼は同じように地先の小島を持つ糸満でもかつては行なわれていたと推理されるものである。

なお、君島久子教授は糸満のハーレー行事に付随するさまざまな演技や競技などについても中国大陸の龍舟行事と細かな比較を試みつつあり成果が期待できる。

那覇の爬龍船行事は他の地域のそれとちがって競漕に使われる舟がちゃんと竜頭と竜尾をそなえたものであり、漕ぎ手や鉦打ち、舵取りを含めて総勢42人が乗り込む本格的な競技用龍舟となっている。また構造や漕ぎ手の構成、三艘の舟の色彩が濃緑色、黄色、黒色と分けられていることなどに洗練・技巧化されたものがみられる。そのことは久米村に在住していた中国福建からの帰化人の子孫いわゆる唐菜の文化の強いかわりを示すものである。

那覇の爬龍船行事の起源については、「球陽」巻一に「竜舟競渡の説」として大略次のような記述がある。

「昔、久米村、那覇(東・西)若狹町、垣花、泉崎、上泊、下泊などの村に爬龍船があつた。だが

今は那覇、久米村、泊村の三隻があつて四月二十八日から五月二日まで唐栄の前の入江で競漕をし、五月三日は西の海に浮かべ、五月四日に那覇の港で競漕をした。沖縄における竜舟の起源については、三十六性の来住以後であること、あるいは長浜大夫という人物が南京より倣つて来たという伝承があるが、一説によれば南山王の弟汪応祖が南京に学んだとき竜舟競漕をみて感激し、帰国後入江を望む豊見城の国の入江に集まり競漕をして王の供覧を仰いだ。いまでも端午の節句の前日那覇、久米村、泊村の竜舟三隻が豊見城のイビの前行き、豊見城ノロが冥福を祈る。竜舟の漕ぎ手たちもイベを遙拝するというのはこの故事に拠ることである。^(注⑨)

この記述から那覇の竜舟行事の古い形態を深るにはまだ多くの疑問を解かなければならないが、かつては多くの村々から竜舟船が出ていたこと、ノロ祭祀の体系に組み込まれていたことなどは大変興味深い。那覇の竜舟行事も外来文化と土着的な信仰体系との融合したものといふことができる。そのことに関連して歴史研究家渡口真清氏が「竜舟艇と那覇の曙」という論文のなかで那覇の竜舟行事の基底に今日の沖縄北部で行なわれているウンジャミ祭と同じ祭祀があつたのではないかという見解を示されていることに注目したい。^(注⑩) 渡口氏の説は古き時代の那覇港は漫湖の内にあつて、豊見城の支配下にあつて漫湖の住民はウンジャミ祭をやっていたが、後に浮島に移住し、唐栄の行なっていた大陸起源の竜舟行事と土着の祭祀であるウンジャミ祭が融合したという示唆に富むものであるが二つの祭祀が合流する契機は尚円王即位の祝賀であり、それは那覇港の警備にあたっていた御物城の

指令によるものであつたとする考えにはまだ検証を要する点があるが大変興味をそそられる。

これまで中国文化の影響と思われる旧暦五月の竜舟行事と沖縄の土着的信仰体系とのかわりを見ながら、沖縄のハーリー（竜舟）祭祀に例示された沖縄の民俗文化の地域的特性を示そうとしてきた。沖縄の人々が中国大陸の文化「竜舟競渡」を受容し自らの民俗文化に取り込み継承することができたのは、外からの文化をうまく自らの文化の論理にあわせて吸収する一種の消化力のようなものが作用したと考える。そのような消化力は世界のどの文化にもあるにちがいないが、強大な力による押しつけでないかぎり、外来の文化を受容するとき、自らの文化と類似または共通する論理もしくは要素があればあるほど、受容がスムーズにゆき消化も進むと考えられる。

中国大陸から伝来した「竜舟競渡」が沖縄の民俗に根をおろしたのは、土着文化としての沖縄北部地域のウンジャミ（海神祭）や八重山西表島のシツ（節祭）にみられる船漕ぎの儀礼やそのような行事を支える神観念や世界観が竜舟競渡の受容の「受け皿」として働いたからではないかと思う。

かかる意味で竜舟行事が沖縄民俗文化として受容定着した過程を考えるには、沖縄の船漕ぎ儀礼をとともなう祭祀行事のうち一二七頁にあげた(ロ)に類別される民俗行事の研究は重要である。

ウンジャミやシツの行事は先に述べたように、海のかなたの神の在所「ニライカナイ」からのユー（豊稜）を招き入れる祈願が中心となつて、海上他界や海上楽土の観念が顕著な海とむすびついた祭祀行事である。類似する民俗行事は島根の美保神社の「諸手船神事」など日本本土にも散在する。中

国大陸の龍舟競渡の行事は福建省や香港など東シナ海沿岸地域では海で行なわれることもあるが、この祭祀の源流はむしろ内陸部の湖沼や河川に結び付く農耕民族のものである。

だが、ウンジャミヤシツの船漕ぎ儀礼は中国大陸の文化と全く関わりはなく、類似性、共通性はないのであろうか。大宜味村塩屋のウンジャミの始まりについて、毎年美しい娘を要求して村人を苦しめていた水中に住む悪い神を或る英雄が退治したことであるという口碑伝承は今後の比較研究への足掛かりになりそうである。^(注⑤) というのは中国貴州省の清水江で行なわれる龍舟競技の起源には、水中の竜に妻と子供を殺された男がその恨みを晴らすべく川底に行つて竜を退治するという伝承が結び付いている。

四、むすび 比較研究の進展を目指して

先述の黄麗雲女史のあげた龍舟競漕の祭祀的機能をもう一度ふりかえつて沖縄の爬龍船行事の意味と対比してみよう。

- (1) 雨乞い 史書に雨乞いのため首里の龍潭に爬龍船を浮かべたという記述がある。龍は水または雨と結びつくという観念は沖縄にもあり、雨乞い祈願に竜もしくは蛇を象徴する蔓草や藻綱を持って入江を横断したり、村の中を回る儀礼がある。しかしながら「ハーリー鉦が鳴つたら雨が上がる(梅雨が明ける)」という沖縄の口碑伝承から見ると、

現行民俗の爬龍船行事が雨乞いに直接結びついているとは思えない。

- (2) 豊作祈願 沖縄の爬龍船行事がその基底に農耕儀礼としてのウンジャミなどの行事がかかわるとすれば、豊作祈願がまさに本来の意味であろう。沖縄のユー(豊稔)の観念は豊作、豊漁、多産を包括する意味をもっている。

- (3) 水神祭 龍が水や雨を司るという観念からすれば龍は水神であろうが、沖縄の船漕ぎ儀礼は、「ニライカナイ」に代表される他界観、来訪神観念と結び付いていて水神という観念とは異なると思われる。

- (4) 水死者の鎮魂 私が観察した香港の龍舟行事においてもこの水死者の供養儀礼は重要な位置を占めていた。沖縄ではどうだろうか。糸満ではハーレーの日の夕方、海岸で酒や線香を供え海で死んだ人を供養する「ハマウリ」という祈願を行なう。そして翌日五月五日は「グソウパーレー」(後生のハーレー)といい海で死んだ祖先が爬龍船を漕ぐとして漁に出ない。それは中国の龍舟祭の習俗と共通するものである。

- (5) 厄除被災 害虫や悪疫を追い払う儀礼は沖縄の各地にある。「アブシバレー」(蛙払い)と呼ぶ行事が四月のなかごろあつて、沖縄本島北部にはその行事と船漕ぎ儀礼が結び付いている例がみられる。この船漕ぎ儀礼は土着的なウンジャミやシヌグと関連するものである。

(6) 屈原を救う 龍舟競渡の起源を屈原の入水の話と結びつけることは、中国の民間伝承の一形態であり、中国各地にはさまざまな龍舟行事の起源説話がある。沖縄の爬龍船の起源説話にもこの屈原の故事に似たものがあるが、その故事伝承も中国大陸からの「龍舟文化複合」の一要素とみることができる。

右にあげた黄麗雲女史の祭祀的機能の中国と沖縄との対比のほかに、やや推論の域を出ないのであるが、今後の比較を進めるために二、三考えていることを述べておきたい。

今日的那覇や糸満の爬龍船行事は旧五月四日の一日だけの行事で終わっているが、先にあげた(一三三頁)『球陽』巻一の「竜舟競渡の説」の記述を見ると、那覇周辺の村々から爬龍船が出て四月二十八日から五月四日まで、漫湖を中心とする入江や沖合で競漕を繰り返していたようである。村々から爬龍船を出すというのは香港の漁村でも貴州省の清水江でも見られていたことである。村から一隻づつ舟を出すという形が古い形であったかもしれない。

また四月二十八日といえば沖縄北部の虫払い(アシバーレー)の時期と重なり、虫払いなど災厄払い的な行事と船漕ぎとの結びつきが考えられる。

爬龍船が豊見城の村を訪れることあるいは村の拝所を遙拝する儀式があったようであるが、それは香港の龍舟の「遊竜」(ヤオロン)の儀礼をほうふつさせる。香港では龍舟が周辺の海浜に面した村

を訪れると村から「標」(ビャオ)とよぶ赤い旗で表わす祝儀が贈られる。また貴州省の龍舟は川沿いの村々を訪れあひるや豚または米などの贈答を受けていたが、このように龍舟が村にやって来ることが招福を意味しているようである。沖縄の爬龍船や他の船漕ぎ儀礼の意味も豊穡を招き入れるという儀礼である。香港のばあいあきらかに沖合から村めざして漕ぎ競う所作があり、筆者にはそれが沖縄の船漕ぎ行事と重なるように見えた。

沖合から村に漕ぎ競う形は、中国雲南のタイ族の龍舟競技で対岸から河を漕ぎ渡る、河を横切る形式と共通する意味があるのではない。

アジアの民俗を沖縄の民俗を通して見ると、沖縄の民俗文化に融合したさまざまな周辺諸民族文化の要素を分析することは、沖縄の文化の個性をみきわめるために必要なことである。今後さらに研究が進められて沖縄の民族文化だけでなく他のアジア地域の文化の理解が深まることに期待したい。

注

注① 柳田国男監修、民族学研究所編『民俗学辞典』一九五三年 東京堂

注② 福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』一九五八年 有斐閣

注③ 宮城真治『古代沖縄の姿』一九五四年

注④ 柴田恵治・高山久明「長崎ペーロンとその周辺」『海史研究』第三十八号 一九八二年

注⑤ 黄麗雲「龍舟競漕の比較研究序説」『待兼山論叢(日本学篇)』第十八号 一九八二年

黄麗雲「台湾における龍舟競漕の現状調査——比較研究のための一資料として」『日本学報』第四号 一

九八五年 大阪大学文学部日本学研究室 そのほか、龍舟（爬龍船）の研究については、文崇一「九歌中的水神與華南的龍舟賽神」〔民族学研究所集刊〕第十一期、中央研究所、台湾（一九六一年）、Goran Aijmer「The Dragon Boat Festival on the Hupen-Hunan Plain, Central China: A Study in the Ceremonialism Ethnographical Museum of Sweden」ストックホルム、一九六四年、ヨースラン、アイマー「華中、湖北・湖南平野の龍舟祭——田植え儀式の研究」W、エバーハルト著、白鳥芳郎監訳「古代中国の地方文化」（六興出版（一九八七年）などの必読の研究成果がある。アイマーの成果は琉球大学の民俗研究クラブのOBたちと全訳を試みたことがあり、いずれそれらの成果を参考にして研究を深めてみたい。その意味で本稿は予備的な考察にすぎない。

注⑤ その成果の一部は「THE DRAGON BOAT FESTIVAL IN HONGKONG」(Y. Shiratori ed.) として出版された。一九八五年 上智大学

注⑦ 横山 重編「琉球史料叢書」東京美術（一九七二年 第一巻 一七八頁。なお文中の「若人爬龍船」は「若狭爬龍船」の誤りであろうが、原文のままとした。

注⑧ 全右 一八四頁

注⑨ 前掲黄麗雲（一九八二年論文）

注⑩ 君島久子「竜神（竜女）説話と龍舟祭（一）」『国立民族学博物館研究報告』第二巻一号一九七七年

君島久子「貴州苗族の清水江に於ける龍舟競渡」『中国大陸文化研究』第九・十号併号一九八〇年

君島久子「中国文献にみる龍舟競渡」方志資料を中心として『国立民族学博物館研究報告』第十一巻二号（一九八六年）

注⑪ 馬淵東一「爬龍船について」『沖縄文化』第十六号（一九六四年）

馬淵東一「再び爬龍船について」松本信廣先生追悼論文集「稲・舟・祭」六興出版（一九八二年）

注⑫ ニライカナイの方向または海上かなた、海底もしくは地中であるかについては地域によって変化がみられる

注⑬ 球陽研究会編「球陽」（読み下し編）角川書店（一九八四年本文中の略訳は筆者による。

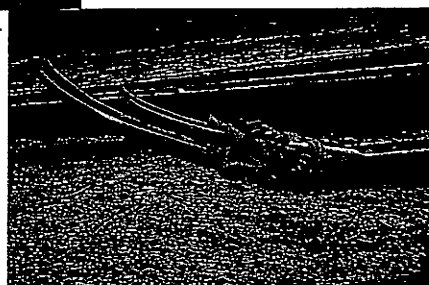
注⑭ 渡口真清（ペンネーム・留宇宙亭）「爬龍船と那覇の曙」『琉球新報』一九六三年六月十九日・六月二十五日

注⑮ 「沖縄県国頭郡志」沖縄県国頭郡教育会発行（一九一九年）

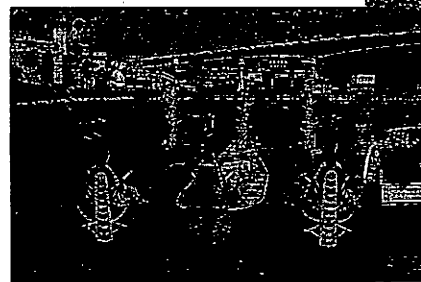
（この論文は琉球大学放送公開講座「地域からの発想」のテキストに書いた「沖縄民俗文化の特性」に、注を含め大幅に加筆したものである。



中国貴州省・清水江に浮かぶ苗族の龍舟



中国雲南省・西双版纳・苗族の龍舟の龍頭



沖縄・那覇の爬龍船
左側から那覇・泊・久米杜



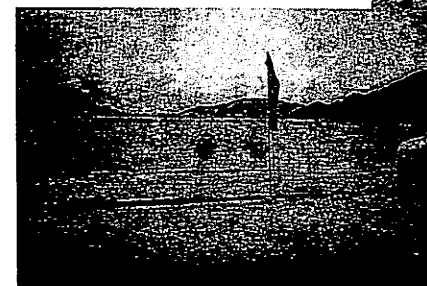
苗族の龍舟競技



村にやってきた龍舟に、豚やあひるなどを贈る苗族の人たち（貴州省）（本文138頁）



龍舟のへさきに、つりさげられた贈物のあひる（本文138頁）



浜に立てられた「標」と、それをめざして漕ぎ寄せる龍舟（香港）（本文139頁）